

篠原幸雄からやましたゆきおへ

# マンガと生きた50年

9

ここに自由なマンガ空間がある

「ふしぎな仲間たち」を発行



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

**おやしマンガ同人誌**

**つれづれ草**

**マンガ展**

マンガと生きた50年

篠原幸雄からやましたゆきおへ

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料



イラスト：篠原幸雄  
(著者少年ジャンプと週刊少年マガジン(著者)の次五)

**日時：10月20日(金)～10月29日(日)**  
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

**会場：森下文化センター1F展示ロビー**

**お問合せ：森下文化センター**  
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17  
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677  
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分  
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分  
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





# 9、ここに自由なマンガ空間がある 「ふしぎな仲間たち」を発行

当時は、週刊マンガ誌が発行部数100万部を超え、マンガが表現手段として認知され始めた時でした。商業誌は発行部数を競う中で、人気投票で作品の優劣を決め「人気がとれる作品を作れ！」と編集者やマンガ家を競い合わせました。

マンガにはもっと多種多様な表現の可能性があり、読者には今まで想像も付かなかったマンガ体験をしてもらえる様になるはずと考え、「ここに自由なマンガ空間がある」と副題をつけて発行したのが、「ふしぎな仲間たち」という自費出版のマンガ雑誌です。



創刊1号・1974年10月発行

# 第1号の編集後記で伝えたかった事

## 編集後記

毎週、何種類もの週刊誌が100万・160万部と、その部数を競い合い、マンガブーム、マンガブームと騒がれているマンガ界の中で……そこに発表される事のないマンガの実に多い事に驚かされます。

それも、より多くの人々の支持を得られない、雑誌の売上を延ばす種類のマンガではない、[つまり「良い作品だけど、これじゃ人気とれないよ！」と言う事]などの理由で……

100万部売る雑誌に載るマンガは100万人の人の心を動かせる作品でなければいけないのでしょうか？たとえそれが100人の人の心しか動かせない作品であっても、その作品を永遠に闇に葬ってしまう権利を誰が持っているのでしょうか？その100人の人々は自分の読みたい作品があるのに、手に取って見る事もできないのです。

作品を売りたいために、いやいや人気マンガのまねをして、才能をすり減らしてしまう人、自分の本当に描きたい作品を描けないためにペンを折ってしまう人。

マンガは大手出版社の商売道具だけではないのです。

マンガを、本当にマンガを愛する人々の手に取り戻すためにも、マンガ家自身の手で、真険にマンガに取り組んで行く場が必要なのです。

この「ふしぎな仲間たち」はそんな「場」になることを目的に生まれたものです。

マンガを愛する人々の協力を、お願いします。

[篠原]

＊

＊

まず、たとえどんなものでも兎に角作品をかいていれば幸せ、と言うタイプ、

さらに進んで、前の事は勿論だが、それに思想性〔この言葉の意味を知らない人、ちゃんと辞書を引きなさいよ、誰が政治的な事だけに用いると決めたのですか?〕を持たせる——つまり、一つの表現方法としてかくタイプ、

どちらが良くて、どちらが悪い、と言うのでは無い〔極論すれば、前者は後者に含まれるのだから〕、しかし、作家も編集も、考えなくてはならない時期に来ている事は確かだ。自ら差別しては、まともなものも、まともでなくなってしまう。

昔、それに光明を見出していたのは、児童文学であり、SFだった。

児童文学に限って言えば、文学〔あえて純文学とは言わない〕に差別され、ガキのみが読むものとして、一部の人を除いて、見向きもされなかった。児童文学はそれに対して、闘って来たのだ。

自分自身、読者対象とは、対象のみが読むのではなく、その対象も読める〔理解できる〕ものと考え——対象に重点が置かれる事は勿論だが——支持して来た。

だが、児童文学もまた、マンガを差別していた。今のままでは、その差別を拭い去る事はできない。なんとかしなくっちゃ、ねエ。

SFが一つの表現方法として確立された今、あらゆるものはあらゆる可能性が有るのだから。 [M]

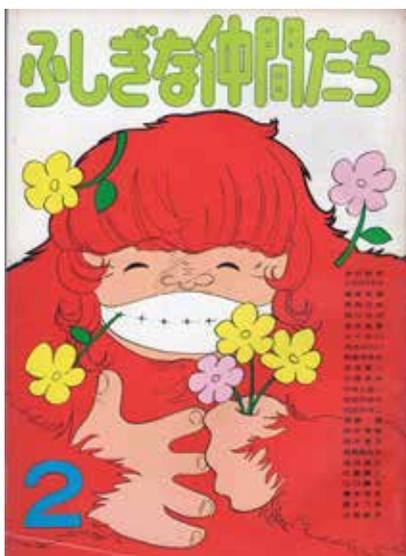
## マンガの可能性を信じて……

自分自身が、マンガの発表の場を失ったことで、自費出版のマンガ雑誌をつくること、新たな仲間、田村良介氏とマンガ雑誌「ふしぎな仲間たち」を発行。区民祭り等のイベントへ参加しての手売りや、アニメ上映会やフォークコンサートの会場へ行ってチラシをくばったりして通信販売等で、半年あまりで1号目の2000部を完売した。

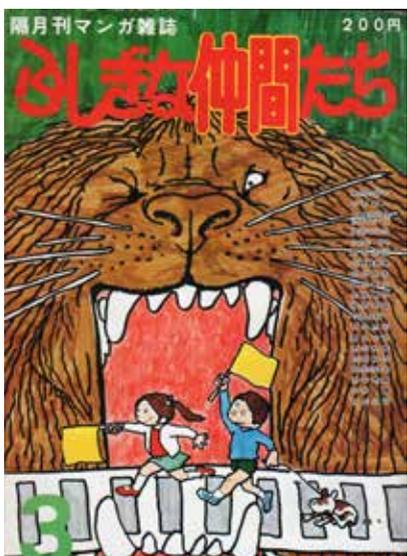
当時、「ぴあ」とか「シティロード」といった書店に直販するような雑誌が成功し始めていたので、この方法なら自分でもできるだろうと思いつき、2号目からは書店を訪ねて、直接書店に置いてもらうよう頼んで回った。3号目からは、隔月発行の雑誌にしていた。

当時の私は、COMやガロとも違う、表現手段としてのマンガの可能性を信じ、実現する商業誌になると自負していた。

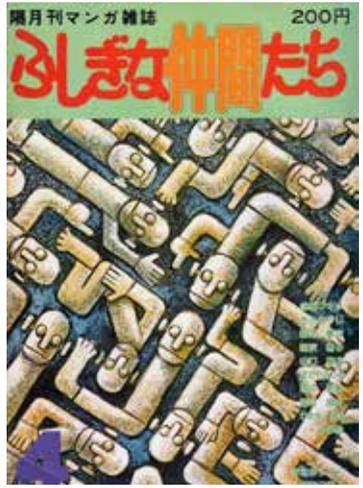
文・新つれづれ草第7号掲載「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



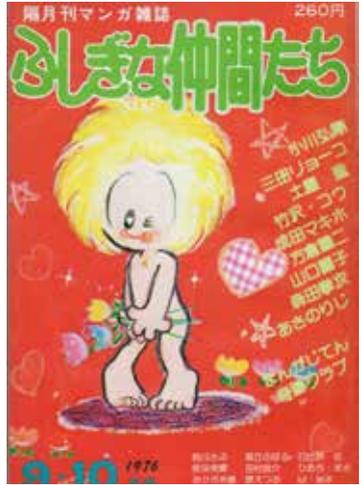
第2号・1975年6月発行



第3号・1976年1月発行



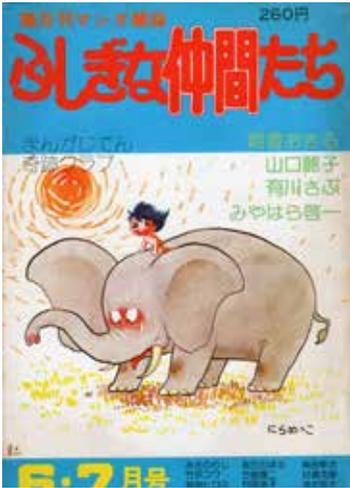
第4号・1976年3月発行



第6号 (1976年9・10月号)  
・1976年9月発行



第8号 (1977年1・2月号)  
・1977年1月発行



第5号 (1976年6・7月号)  
・1976年5月発行



第7号 (1976年11・12月号)  
・1976年11月発行



第9号 (1977年3・4月号)  
・1977年3月発行

「ふしぎな仲間たち」は1974年10月30日発行の第1号から、1977年3月1日発行の第9号まで、2年半の間、たくさんの読者と作家の支援で続けることができました。